

野

菊

永田俊子



野
菊

永田
俊子

まえがき

永田俊子伯母が、一〇一歳になったが生活も落ち着いているので、昭和三十八年（一九六三年）ごろから創作活動をしてきた歌作りのまとめをしてみたいがどうだろうかとおっしゃったのは今年のはじめのことでした。

私と家内（伯母の姪）は月一度は様子見がてら訪問を重ねていたので、伯母の健康状況からみたら、私たちが知らないことが多々あっても問い掛ければ何らかの示唆をしてくれることは分かっていたので、念のため現在の保管・保存状況をおうかがいし、一昨年に家を解体してかなりの資料が散逸したとはいえ二人で補えばなんとか歌集編纂はできそうにおもわれ、お手伝いを引き受けることにいたしました。

というのも伯母はこれまで歌集に「夕虹」（昭和六十二年）、岩下ゆう二

先生ご指導の同人の方々とは句集「春時雨」（昭和四十九年）、「花篝」（昭和五十四年）、「新樹」（昭和六十三年）を、また川柳で「鶴の瞑想」（昭和六十三年）、を世にだし、また「南風」、川柳研究などの同人の方々の歌や川柳と一緒に新聞紙上に掲載された作品をノートにこまめにきりぬきし、或は川柳塔に掲載された作品を同人の方が年毎に小冊子として取りまとめてください、それらのものを中心にしてみていけば膨大な伯母の歌の足跡をいささかでも辿れると思つたからです。

義父から姉が大賞をいただいたよと言つた話は時折聞いてはいましたが熊本に在住していなかったため伯母がこんなにも作品群をこれまでにつくり、現在でもつくつておられるということを知り、一層の驚きを感じましたが、初めて目を通してみて門外漢の私たちではありますが作品の題

材とその展開、斬新さ、ユーモア、風刺等にあふれ、それなら伯母が自分の仕事の締めくくりだけでなく、皆様に一度目を通していただくことも世に出す目的の一つになるのではないかと思つたことでした。

伯母が若いころから師事した諸先生方、先輩・同僚の方々もお亡くなりになつたか或は活動をやめていらつしやるかして、まえがきを私に書いてはもらえないかといわれ伯母のこれまでの苦勞に少しでも役立つことならと拙文をしたためたしだいでございます。なにとぞご理解くださいますようお願い致します。この作品集が少しでも皆様方の歌作りに役立てば伯母も大変嬉しく思うことと存じます。

平成二十六年四月吉日

石原 伸興

千穂子

目次

俳句集 3

短歌集

新聞紙上掲載短歌 39

夕虹 73

百寿惜春 135

川柳集

新聞紙上掲載川柳 143

鶴の瞑想より 161

川柳塔誌掲載川柳 218

平成二十五、二十六年川柳塔掲載川柳 289

あとがき 300

俳句集



昭和二十九年読書会サークルから十人ほどの俳句の会「やよい会」がスタートし、岩下ゆう二先生を時折お迎えして活動し三十年の間の苦心の俳句を句集として記念に残こそうとなったのがこの春時雨、花篝、新樹のほほ十年おきに刊行された句集です。

句集

春時雨より「吊りランプ」(刊行昭和四十九年十月)

四十七句中二十八句抜粹しました

立春の風漫帆にうたせ網

立てかけし琴ある新居春の月

掌にうけて頂く集ひ花菜漬

竹林の奥より暮れて春寒し

春陰の深きへ傾ぐ野の仏

花冷えの古墳に生れし飛鳥びと

ゆく春の旅に親しき京ことば

水銀灯あはし明石の春潮に

月着陸待つ静寂の水中花

母といふ哀歎しらで青葉木菟

黒揚羽つねのごと舞ひ宇宙事故

残月のいつまで赤し半夏生

竹落葉古墳の村は牛も飼ふ

行商の荒き言葉や阿蘇残暑

ふるさとに急ぐ花野や昼の月

秋暮るゝ骨董店の吊りランプ

帰心はや日向の駅に秋灯す

秋の旅果てゝひとり
の土鈴振る

クレーターに童話は消えて月育つ

愛機尾灯消ゆる夜空も秋の果

薪割れば音の高さに秋澄めり

余白多きバス停時刻萩の寺

耳遠き母なに笑ふ秋の雨

海近き川引潮にやせて冬

コンピユーターの声は中性冬ざる、

潮引きし一湾の昏れ鳥渡る

水涸れし池の石橋踏めば冬

投函すポストの底の音も冬

ア
ポ
ロ
と
ぶ
夜
々
を
や
せ
ゆ
く
冬
の
月

寒
の
月
夫
の
忌
近
し
悔
い
多
し



中村汀女先生・岩下ゆう二先生を囲んで

句集

花篝より「夕虹」

(刊行昭和五十四年六月)

五十七句中二十六句抜粹

行春やこけしも入るる離京の荷

御廟所の朽ちし脇門竹の秋

侘助に結ぶ喪の幕はや翳る

吾子なきもよしと若葉の細月に

とり替ふるラジオの電池梅雨深し

風動く水の上なる夏座敷

ひとつ摘むひとりの卓の花茗荷

ふるさとに知らぬ人ふえ墓洗ふ

かざす手に夕月と
きに得て踊る

萩の風透す青磁の透かし彫

石佛の慈顔童顔木の実降る

つゆけさは足もとよりの湖畔かな

落し文露坐み仏の手に頬に

汀までひとすじ白し月の道

里程標つなぐ花野や阿蘇裾野

白樺に秋光しるし峠越す

飛機仰ぐ夕月に得し渡り鳥

芭蕉林に集まる風や暮の秋

黄落に裳裾埋めて磨崖仏

風が消す母のつぶやき秋暮るる

病室の一灯のみに冴返る

眼鏡橋弧の奥深き冬紅葉

鴨一羽飛来湖心の群れに入る

灰文字を母が書く癖一葉忌

冬空に気球の弧愁つながるる

人逝いて生まれて冬の月の蝕

句集

新樹より「水ぐるま」(刊行昭和六十三年六月)

五十七句中三十一句抜粹

初ひかり刻めばゆらぐ花時計

地球儀の藍濃き海や秋立てり

傘に花たたみてくぐる大手門

秋光や刻滴たらす水車

足音を砂丘に残し秋惜む

但馬路の谷間高稲架はや翳る

猪垣の低きに頼る丹波稲架

白梅や高き天守に低く侍す

歩道橋 二月の風が語尾さらふ

末^す黒^{ぐろ}野^の 余燼すでに母胎の温みもつ

古代恋ふる石人石馬黄砂降る

涅槃図の衆生に高き月の空

時が隔つ亡夫との距離や天の川

片仮名のタイプの宛名額の花

早春の匙にプディングゆれやすし

北鮮に夢馳する夜や青リンゴ

パズル解いて笑ふもひとり秋時雨

矢部八朔ひとすじ町を風とゆく

開拓の墓は北向き蝦夷きすげ

相似たる顔や忌日の春炬燵

父返せ母返せの慰霊碑低し鳥帰る

鶴万羽の占めたる広野風二月

群れをはなれし鶴しぐれ野の点となる

草の実や牧場に近き畜魂碑

広袖に梅の風ため神楽舞

春愁や広告まとひてゆく電車

峠つなぐ鉄塔孤独冬の天

ばらアーチやせて透けたる空高し

吹く風に鴨の帰心や羽ばたけり

喪の家によせ合ひ立てし時雨傘

鳩歩く朝の小閑街師走

ノートの習作より抜粋

露天湯へみちびく石露の花明り

虫を引く蟻には蟻の労働歌

殉教の像の素足の寒さかな

水はじく茄子の命の光けり

木犀や路地まっすぐに風匂う

一湾抱く虹の松原片しぐれ

乱れゆく敬語はらりと桐一葉

悼みきて我も行く道大枯野

冬田越えカメラで引き寄す阿蘇五岳

音もなく芽立ち急かする春の雨

けじめなき独りのくらし日脚伸ぶ

羽根ひとつ文とし露とし鳥渡る

吸物に咲かせし花麩春障子

バス降りて五月の風になる歩巾

山藤やなだれ咲きても乱れなし

わら屋根を沈めて高き朴ほうの花

合歡の葉を眠りに誘ふ風やさし

夢にても逢ひたし文月の母の星

さわやかにレモンを絞る白き皿

なだれ咲く菊の疲れに冬陽射す

電飾のがんじがらめに哭く冬木

歩巾次第に狭くなりゆく去年今年

着ぶくれて付録の人生丸く坐す

小春日や笑い羅漢に泣き羅漢

考える葦とやすでに芽を抱く

画展見し余韻静かに青き踏む

春愁や一期一会の自動ドア

しだれ桜ときおり風が梳くしけずる

雨の芍薬ひとひら落ちて船になる

軋む戸をなだめ閉す窓梅雨に入る

切符とび出す改札口や風五月

愚痴ひとつ煙と流す蚊やり香

捨てし夢あきらめし夢盆の月

折鶴のため息もらす原爆忌

晩年の無欲に咲きし白芙蓉

カンナ燃ゆ島の哀史のかくれ耶蘇

父、母がより添ひてゆく秋の雲

落葉して蓬髪老樹城に侍す

光る風集めふくるる芒原

名人のまなこの闇にためし冬

煮こごりや活断層の上に住む

待春の風に生まるる葦の私語

天よりの便りや雪のちらし文字

山の眠りさますと山に触るる雲

闇に燃ゆ火の文字火の山春の宴

春愁や望郷キリン首伸ばす

刻ゆるやかに運ぶ遅日の観覧車

バナナ青し十七歳の春未熟

古代人の心咲き継ぐ大賀蓮

正直の形に甚平衡干されゐる
思い出を丸め白玉供へけり

地球の吐息弱りし湧水湖晩夏

地下街を出て秋天の色を吸ふ

木犀匂ふ闇を動かす風のあり

凍い滝だきの力や刻をとどめおり

青芝や足あ裏うらに弾はずむ玉ものあり

刻を乗せ琉璃かなしき花筏

せせらぎや濁世はなれし暮春の譜

ひまわりやゴッホ恋ひつつ黄に燃ゆる

思出を小さくたたむ秋扇

コスモスの裾の乱れのままならず

秋風をふわりと見せし蜘蛛の網

夕日もろとも取りこむ布団、日短し

人生の句読点打つ除夜の鐘

安らぎや葉牡丹の渦ゆるめゆく
枯芭蕉風のゆらぎに私語もらす
願い一途りんごの皮を長く剥く
街の灯を消して引き寄す天の川
風鈴や受話器の奥で間をつなぐ

短
歌
集



新聞紙上掲載短歌

昭和三十九年頃から同人雑誌「南風」に取り上げられ、その中から新聞紙上抜粋され紹介された短歌をまとめて見ました。

思い切り鍋に油をはじかせてきょうの忍従の肩少し軽し

皮むけば白桃の汁したたりて夫とのくらし戻ることなし

うつむきて針運びつつ老い行くか錆びし鋏の今宵冷たし

命冥加に帰着はせしが残しおきし布団を思う引揚者われ

墓まうで果たしてよろこぶ母みれば心うれし老いませる母

アセチレンガスのにおいとするめやくにおいが遠き思い出誘う

ラジオより聞ゆる母校の優勝に君のまなこのうるめるが見ゆ

ながき日は暮るるにいまだ発動機なりやまずして麦のとりいれ

みどり児の泣く声まぜて録音は炭坑主婦連の労働歌伝う

爆音が行きつ戻りつ聞ゆれど感慨もなし敗れてよりは

平穩に過ぎ来しわれや陽に熟れしざくろは割るる熱情持てり

病いえうれしき朝をにぎわしく雀のなきぬ歯切れよき声

母上の足をさすれば若かりし姿うかびぬ細きその足

かけし糸銀色に光りようやくに座を占め得めたる蜘蛛の安らぎ

退院のハイヤー飛ばす窓の外五月の風に泳ぐ鯉あり

かきならずジンのタのかけに人の世の苦しさがあり雨もよう空

両の手を上げて針穴通しあるわれの影絵のいたく貧しき

仏壇の隅より昼の蚊なき出でて訪るる人なし二度目の盆は

夫を早く逝かしめしと思う夜の更けを桃のいたみは広がりゆかん
退職願書き終へし夫が暫くを身じろがずゐしが冷えし茶すすりぬ

やがて廃止さると聞ける私鉄道が音きしましてけふも通れり

皮むきしらつきょうの匂い指先に滲みて三十年の妻の座長し

野心なき夫と吾とが住む家をめぐる青葉に押されつつ過ぐる

ポケットにふれ合ふ鍵の音悲し孤独は常に我にまつはり

亡き夫の片べりの下駄ながめつつ足癖なじりしことを悔いある

縫合の夫の疵あとを洗ふときわが指先の力抜けゆく

自動車にて母来ることも悲しみのひとつかとみに足萎えたれば

わが誕生日祝ひくるるは母ひとり小鯛持ちたる手を腰に当て

味噌がめに味噌を満たして立冬の厨明るき陽をかえしおり

おおかたは形なきわれの仕事にて拭きたる縁に吹き上ぐる埃

市場籠下げつつ花嫁の列に会ふちびたるわれの下駄音立つに

風鳴れば夫眠る原も寒からむ湯気たつ汁をわれはすすりつ

枇杷の花散らして百舌は飛び立てりわれ平穩になれゆくときに

洗濯板の凹み次第に深まりて物干せばあとむなしわが手は

秤の目盛りいと正確に売られゆく廢鶏の眼のまばたきを見つ

足萎えし母が味噌つきの季を告ぐ百日紅の花咲くを見て

乾きたる庭吹く風に仮寝せし猫がそば立つるうすき両耳

憚らず産卵の声上ぐる牝鶏の目のあるとき淋し

女身ゆえの咎を肯ふあはれとも山路に残る女人堂小さし

客一人降りて二人を乗せてゆく天草訛り潮風のなか

俵山なだる立ち木にまつはりて保てる藤のうすき紫

人招くがに百日紅の花ゆるる夫待つことの絶えて久しき

祈るべき心を持たぬ貧しさは春の時雨にぬれてつめたし

諾ふになれきし象かつながれて耳ゆるやかに風に泳がす

谷川の水吸ひあぐる苦瓜の黄の花しるくぬらす朝雨

歌碑の師も呼ばむ降神の声朗々と球磨の川辺に今ぞひびかふ

客を呼ぶコタンの店に熊を彫るその祖たちが射たりし熊を

足枷のさだめ肯ふ象の目の長きまつげのまばたきやさし

次に寄する波のしぶきを待ちてをり海の彼方にわが住みし過去
放されし朱鷺に無限の空ありき初の飛翔の低き旋回

選は熊日歌壇 土岐善麿先生・斎藤史先生 他

還らざる日

放たれし風船消ゆる空の果て還らざる日の美しき虹

靴ならし帰るうからとてなし確実に待たで訪るる日々の夕暮れ

時経てば忘れ去ること悲しとも岩ひたし満ちゆく春潮

ミサの鐘きこゆる夕をひた抱く小さき幸せ閉ざす灯の窓

亡き夫と歩みし過去はよく見えて未明の空に消えてゆく星

げんげ田の少なくなりし野を行きて遠き記憶の赤き鼻緒よ

ふりむけばいささかの幸消えゆかむわら塚に残る片側の雪

また過去に急ぐ明日とも兆す夜を桃のいたみはひろがりゆかむ

くり返す潮の満ち干にたまゆらのわれのひと世の足跡も消ゆ

県民文学賞短歌部門入選 さくら

相寄りて流離かなしき花筏刻ときのせ流るる淘汰うるはし

古い樹とて花咲く自負や山桜咲きてぞしるき光をまとふ

愛惜の西行、もののふ抱きつつ眠るか真夜の桜大樹は

供華もなき兵士の墓にさくら花涙となりて散るや片々

大和ごころ埋もれて久し草はらに平成安穩花下の飲食おんじき

うつそみのはたては孤独夜ざくらに愛深めゐる道祖神美はし

夕ざくら風に散りゆくわが身とも残生しばしひとりの快樂けらく

わが額にふりくる社の花びらを幣とし戴く晩節の栄え

さくら花散りても美はしき花屑の名に憧るるわれも老いたり

すぎ来しの慙愧秘めつつ永らへて畏れ踏みゆく花の浄土を

(さくら了)

散りしままの姿崩さず流さるる木の葉に未知の急流あらむ

遠き世をはた海恋ふか靴うらに鳴る貝塚の乾きたる音

散る花にも流るる水にもそふ光かく美しく時はうつらふ

海鳴りのけふはやさしと若布干す節太き手を海にかざしつ

白秋の生家訪ふ道迷ひつつ野火の煙の行方を見守る

傘立てに母が使ひし杖ひとつ傾きて立てり日日積む埃

展示さるる民具の類ひ親しくて例へば浮かぶ朶すりの唄

卒塔婆の名はみな水子よ暖かき日ざし斜めに暫く届く

竹林のしぐれはやさし雫さへ青き色して音なく浸みる

城壁に書き残したる文字あまたなべて過去へと運ぶ風あり

漱石への思ひはるかに展がれる絹雲やさし那古井の上に

花閉じて眠りにつかむ秋草の花にやさしき霧の生れあゆく

阿蘇の野に立つ彫像のむきむきに群落にして距離もつ孤影

もりあがり満ちくる波に限りある私の時間が渚に消ゆる

よな土を浮かせ青める麦の芽の切先鋭く勢ひ列なす

自我なきはかく素直にて吹く風に従ひ動く湖面の羽毛

地軸よし届く神意の水にしてこぼるる光が作れる波紋

元寇に逝きたる人もや戦跡の河原這ひつつ咲きし昼顔

ボタ山に秘めたる修羅の悲しみを癒す風あり夏草そよぐ

朗々と神よぶ声のこだまして風に乗り来し阿蘇の神々

暮れてはや戸を閉す宿場ひとすじの町を眠らす瀬音は細し

新しき暦にいかなる日日あらむ未来が秘めし照る日曇る日

大陸に渡りたる日もはるかにて干潟の果てに退きし海光

離合待つ無人馱わが窓枠に花野の蝶が舞ひきてとまる

ふくらみ尖る菖蒲の蕾天を指しわが失ひしみづみづしきもの

死してなほ兵より遠き一隅に軍夫墓あり低く小さく

空翔かくる木馬に乗ればわが手よりいつしか抜けし縛のもろもろ

無造作に割りたる卵盛り上がる黄身が抱ける小さき命

立てばすぐ手を泳がする失明の友に手を添へ段差知らする

遠き世に思ひ馳せゐる薪能の上空よぎる機灯が青し

魚の道知りたる人の赤きウキなにげなきさまをして流るる

女工哀話聞きつつ越ゆる峠路の霧晴れやらす湿めるバス窓

つかみ得しものは何もなき掌の中で胡桃が鳴れり乾ける音に

噴き上ぐる水にくぐまり摘草を洗ふ人あり緑豊かに

いにしへの人も摘みたる野の草を摘む人ありて雲は移らふ

手のひらに揺るる豆腐をだまし切りいつか続きし女系三代

一途なる気力失ゆく日々にして飛行機雲のひとすぢ白し

落葉朽ちし湿りはやさし靴裏にふはりと沈み今日が暮れゆく

潮風に風蝕しるき野ざらしの仁王のまなじり鈍りやはらく

吹き荒れてつね定めなき大砂漠の砂とぞやさしつまみし指に

弁当の蓋の飯粒拾ひ食むいくさ日よりの身につきし癖

青年の主張ひとつを沈ませて堰音高き過疎の谷川

人のなさけうすれゆく世に浄瑠璃の人形おゆみがおんおんと泣く

街道に埃浴びたる浜木綿が乱れつ恋ふは青き渚か

谷川に濯ぐひとありまなうらの母の姿か背なの小さし

からからと蹴らるる空缶夕窓のひとりの心にころがりて来る

竹林を透きてきこゆる鶯の次の声待つ深きしずもり

囀りといふにはあらね若葉かげ抑揚やさしき鳥の求愛

海見つつ夢描きたらむ療院の跡にきこゆる遠き海鳴り

渴水のやせたる川力なき流れに迷ふ堰の芥は

ゆく末のさだかならざる危惧ひとつ持ちつつ揺るる吊橋を

暮れそめし湖の岸边のひとところかたまり灯す黄の花菖蒲

ふり返りても詮なき齡一瞬の花火の音に消ゆるまぼろし

宿坊の障子にうつる灯籠の消えたる夜半に青葉木兎なく

松下紘一郎熊日短歌時評（平成七年十月二日）より最近県内誌注目目の歌として紹介されました

都恋ふときもやあらむ落人の末裔住める空わたる雁

春を待つところひたすら潮風の吹くこの道のはての海恋ふ

荒れてゆく地球嘆かひ空飛べば墓域のごとし群ゐるビルは

人生れて逝く俗界を見下ろせる春の月あり通夜にゆく道

うすれゆく遠き日の夢かきたつる雨にぬれゐる花柘榴の朱

脚高き小さき石橋わたりゆく潮引き残せしこれぞ水鳥

ひろげ合ひし芭蕉の葉と葉交はりて風に生れゐる私語がやさしき

美しき陶器に生るる夢あらむ透く水底に陶土眠れり

鳥歌ふ広き畑の葱坊主をちこちゆるる風のタクトに

湧水の別れて合ひて流れゆく清きかそけき恋にかあらむ

老いと言ふこと好まねどつきまとふ前くぐみなるわが影法師

咲ききりて力つきたる蓮の花風なきに散るはらりはらりと

哀しみいくつくり返しきし道なれや過去美しく消えし夕虹

咲き残る水引草のくれなゐをいよよ深むる秋のしぐれは

彫り上げて石屋の隅に立ち給ふ小さき菩薩を冬日あたたむ

鯛割く指にあたりて尖りたる固き背骨の一語を聞きぬ

白梅の枝先天に尖りつつ育くみおらむ結実

風折れのさくら伏しつかかげゐる八重の花びら八重の哀しみ

遠き日の心の傷もうすれつつ合歡の花咲くしたみちを行く

風とゆく阿蘇の山路やかげりきし山影受くる山のやさしさ

ビニールの袋破りし馬鈴薯のいややはらかに白き芽尖る

長き堰堤歩きて過ぎし世を思ふいま静かなりダムの水面

ギター弾く若きが地におく空き箱に天よりの喜捨さくら舞ひ込む

ふるさとに戻りし鮎を待ちゐたる堰音高き籜やなの青竹

かなかながカナカナと鳴く哀しみの連鎖の一生か生きると言ふは

紫の濃き椰子の実ひとつ卓におく影より生るる山をよぶ声

天指して干されし軍手汚れなき手にてつかまむ生まれたる虹を

読みかけの本をめくりゆく風が急かす残りの頁の時間

天真爛漫それぞれ個性をさらしめる五百羅漢の百態すがし

柚子の香を皿に心に満たしつつ生れし日遠く想ふ食卓

せせらぎは芽吹き急かする山水の賛歌なるべし光り流るる

白内障手術受くると仰向きて今や俎上の鯉になりたり

夕空にたなびく雲のあやなして色うつりゆく今日のフィナーレ

寝返れば水音高し氷満つ海を枕にまどろむしばし

降る雪に遠きふるさと思ふらむ旅に求めし窓のこけしは

紫陽花の思ひゆたかにひと日毎いや増す花の深き藍色

苔まとふ梅の古木の念力を集めし花の香なほ衰へず

夕虹

昭和六十二年七月刊行より抜粋

夕虹

逢はざれば記憶うすらぐ夕虹のさだかならざる弧をさがしをり
命のかぎりなく蟬羨し声出して泣かばやと思ふ夏めぐりくる
かぎりなきけふの哀しみもつれとぶ糸とんぼ二つ影さへ持たずた

藻の花の白き輝き入り陽得て清しき余生ふとおもひをり

危ふさはつねに身近に坂くだる足狂はする美しき雪

信じ来し真実ひとつ暮迫る林のなかの白き山茶花

なべてわが知らぬこと多し湖にきて照りや翳りが見する屈折

生きてゆくこの頼りなきもの踏みしむる足もと脆き砂に崩るる

阿蘇のトルソー

阿蘇の野に立つ彫像のむきむきに群落にして距離もつ弧影

大地に横たわるトルソーの嘆きにきてとまる幻のごとき白蝶ひとつ

天を指し地に伏す彫像ゆるぎなき己が思考の深き影もつ

水底のごとき静けさ阿蘇の野に炎ゆる思ひの貌の彫像

朱唇もつ豊けき像を野ざらしに冬に入りゆく女らの過去

彫像の野に散らばれる切り口の鋭き破片も冬に入りゆく

ゆく秋の翳る陽はやし山壁にためし愁ひの濃くなるゆふべ

ゆふべ吹く野ざらしの風まとひつつ闇に入りゆく大地の彫像

藻の花

ひたぶるに命保たむ湖わたる風によせられ白き藻の花

枯れはてむ命にてよし藻の花の白く輝く夕光ひさせば

藻の花を動かす魚の道あれば生きる命にふれて輝く

長きたそがれ湖の広さに暮れ残り藻の花かたみによりてゆれあふ

藻の花のあはれ水面に浮きて咲く捉へがたき追憶ひとつ

藻の花が航路はさみて咲き競ふ小さき命を川にちりばめ

舟進む波より生るる回想のながく続かず藻の花ゆらぐ

佐渡

金穿大工人形の影をカンテラのあかりがうつす坑壁冷ゆる

一打一打に精魂こむる咎人の手もと狂ひし破調ひとすじ

坑底にこもらふ御魂の嘆きとも地を這ひ聞ゆ水落つる音

鑿^{のみ}あとの鋭き陰影労働の叱咤に耐へて刻みしあとか

過ぎ去りし生々流転観光となりたる坑道みちびく矢印

悲話哀話奈落の闇に閉ざされていま観光に灯る坑底

波音にまじりて聞ゆるおけさ節の哀調くらき佐渡の町並

月に歌ふおけさの唄をとどろ消す佐渡の波音唄よりさびし

山莊

群咲ける大手鞠花の輝やけどきざす翳りを重ねたる白

朽ちてなほ黄の色保つ山吹の花かげ暗く春ゆかむとす

愛告ぐるに轉るのみよ鳥語とて貧しき語彙に身を震はせむ

落葉道尽くるあたりに裏門のなかば開きて今日が逃げゆく

虚ろなる心倚るもの欲しきかな今しひたよる満潮の波

身ぶるひをすればすぐ散る大銀杏夕日集めてひとときの綺羅

紫陽花の毬おもおもとためられし嘆きにふくらみ深みゆく色

紫陽花に百の耳あり百の嘘かくす変化の日かげ日おもて

赤き電車

町騒まちざいを吸ふ川波のさゆらぎに赤き電車が影うつしゆく

生きものの如くにクレーンが向き替ふる危惧なる影はときに頭上に
命終と言はば物みな美しからむ見なれし景も街の灯りも

ひしめきてなほ卵産むこの上のあはれは知らず梅雨しぶく鶏舎

みのらざるわれの夢よりとび立てる蜻蛉乱舞す真昼の砂丘

胸にたたむ思ひひとつにこだはりてあらあらとつぶす夜の母を

去来する雲に日日の風あり形あり膝を抱ける羅漢が見上ぐ

頭なき羅漢にのせし石ひとつ羅漢の顔に見えてかなしき

口之津（長崎県島原半島南端の町）

柳坂よび名やさしい廓町いまに残れる細き格子戸

海よりの風鳴る丘に建てられし彫りうすき字の流人供養塔

砂山に消えし流人のあはれをも聞きて崩るる砂に坐したり

悲話多き口之津台地をふみてゆく足もともろき砂にかたむき

人を恋ふ渦かも幾隻の船呑みしその白波のたぎつ瀬戸渦

瀬戸の海こえて知らせし大事あり早崎台場に建つ狼煙台のろし

武家屋敷に近き処刑場夏草の茂れる奥にかたむく供養碑

湖

白鷺の群よりはなれし一羽にて弧影といはむ夕光^ひ淡し

夕せまる湖に水輪の生れ消えて胸ぬちにたたむひとつ思ひを

群をはなれし鶴の一羽が立つ畦のこの枯れ草のあたたかき色

湖なかの石に三羽の鴨ならぶかかる些事にも見呆くるひとり

青みかん

兵等漬く船体くらき水底に鎮魂の曲か遠き海鳴り

沈みたる船に魚群の泳ぎゐて海がへだつる母国は遠し

この里より海に征きたる人もあらむ過去を沈めて勢ふ青みかん

青みかんゆらげる陰に還らざりし兵が顕つなり山峡の駅

朝に夕に海鳴りきくや海近き丘にならべる兵の墓五基

海に征きし兵らの墓標か海上に湧きあがりたる夏雲雄々し

海に征きし人はも遠き過去となり水脈さわやかに漁船出でゆく

英彦山

幾世経し杉の大木のなか縫ひて英彦山へ登る乱れ石段

のぞきみる千切の谷継母が突き落したるとぞ稚児落し谷

落とされし稚児もありしかなだれ落つる岩のはざまの野菊むらさき

金くさりつたひ登らむ断崖の一点しめて山百合赤し

水源

滾々と湧きてふくれてひろがれる水源神意の尽くることなし

深き水底の砂ふきあがるさまも見ゆ汚濁知らざる神の泉は

ここに湧きて母なる川となりてゆくやさしき波紋ひろがりやまず

水湧けるこの神域にかぐはしき香に顕たつ歌碑の花ひとつ開く

山の影山に落して明けてゆく由布山系の刻々の彩

由布山系におく雲の影軽々と峰より移す風あり

客のなき朝の客馬車霧のせて走る足音瀬音にまじる

滝壺に下る道ありわが知らぬ奈落を思ふ歩をたしかむる

滝音に消さるる声をふりしほり鳴くかなかなが時になきやむ

段きだに立つ観音菩薩がささげ給ふ御手の宝珠に集る寂光

母

片足をすこし引きずる母の足癒ゆることなく年改まる

春空に芽吹かむ命ふくらめる樹下に立ちたる母老いませり

なにするとなく時すごす老い母にひと日毎に日脚伸びゆく

百日紅の花に向けおく再びを履くことのなき母の草履を

別れの日徐々に近づくと夕ぐれにやせたる手もてわれをよぶ母
血縁近きが押すといふ葬り火の釘を押しぬすこしためらひ

傘立てに母が使ひし杖ひとつ傾ぎて立てり日日積む埃

忘れゆく母のやさしさひたひたと深き入江に満つる夕波

明日香

祇王祇女のたゆたふ思ひにとびゆくや竹垣沿ひに低くとぶ蝶

ひと待ちて風の音にも開けたるや祇王の庵の障子吹く風

祇王祇女がこもりし庵をふところに小倉の山の青葉なだるる

横笛の悲恋かすかに息づきて咲く山椿滝口寺に

明日香びとをまた閉じこめし高松の塚守るがにさやぐ竹山

幾歳月を経たる礎石に水ためて浮かす花びら榮華は遠し

亡きひとの御魂こもらふあだし野の竹林さわぐ雨よぶ風に

雨降れば雨の雫を流し合はむ小さき仏の肩ふれあへば

ほのぐらき古墳の奥に沈滞す謎の歲月秘めし石舞台

遠花火

また過去になりゆくひとつ遠花火消えたるあとの闇ふかき空

赤き風船にふくらむ夢もなかりけり暮れそめてより閉ざす夕窓

指先に残るくれなる紫蘇をもむ女の苦とも幸とも

乾く心に踏みゆく落葉の音しみてけふの幸せ零むか余ご子を拾ふ

閃光

平和祈念像の指さす空に光満ち風にのりくるアンジェラスの鐘

片脚で立つ被爆鳥居よ戦と平和の均衡いつまで保つ

渡し舟

渡し舟呼べばのどかに答して客三人を乗せてぞ渡る

倒されし老木が見する年輪に静かにしみる春のぬか雨

もがれたる如き老木の切り口にいづべより来し花のいくひら

花ごろも伏したるかたち倒されしさくらに淡き夕月のいろ

砂丘

手よりこぼすまこと真砂の光もて砂丘に惜しむ刻のうつろひ
遠くより我をよぶ声しきりにて砂丘のはての未知にひかるる
すぐ過去につながらる足跡つけてゆくわが幸もろく崩れゆく砂
ふたすじの足跡砂丘にありありと残りてすがし風紋のうた

断崖の砂丘に立ちて渺茫の海のはてなる空明り恋ふ

砂丘に立つそのひと時をあたためて家苞いえすにする一握の砂

足跡のなき砂丘のくぼみ触れざるはかく美しき波紋の綾

蒲池先生

ありし日の師の面影の清らにて生れては消ゆる水の輪を追ふ

見送りし御うしろ姿まなうらに残る痛みは足萎えの御歩み

師の御声いまは聞かれず夕映の透く芦群に鳴くは葭よしきり

師の歌碑を祝ぎまゐらすかよべの雨晴れて新樹の緑したたる

神主が祓ふ幣おと薫風をきりてさやけし祝ぎの碑の前

歌碑除幕いまぞ鳩翔たつ春空に新樹の秀先ほさきならび立ちたる

北海道

黒き柵海につづける牧場に群をはなれて海を見る馬

網走のその名もあはれくさり塚心も足も縛され果てし

踏み入ればその身沈まむ湿原に労苦沈めて成りし開拓地

未開の地いまだきびしき季ときもちて遠く光れる大雪山の雪

くり返す潮の満ちひきくなしり国後に帰るすべなき流木ひとつ

神秘なる青き毬藻が青き湖恋ふや展示がの毬藻が動く

古墳

四方より古代の魂のよびあふか暗き石室にこもれる冷氣

朱色濃き古墳壁画のゆるぎなき構図を見つつ瞑想果てず

樹木が守る舟型石室の重たき眠りの冬の没^いりつ陽

史料館の窓にさす陽のかけりそめそのうつしゑの刀身光る

武具ならぶ遠き武将の諍ひも雲の流れに消ゆる昼月

愛馬にて駆けし武人の鎧古^ふりて黄砂降る日の埃うすらに

比古と非^ひ売^めとが汲みたる甕か春月に張りたる水をきらめかせつつ

発掘の土器のなかなる闇に住む古代の魂^{たま}ら^いまだ眠りて

思惟ひとつここに集めて壁面に彫られし人のなほ弓をひく

壁面に彫られし舟あり海恋の線あざやかに古代に生きし

遠き世より何訴ふる風過ぎてまなこうつろに石人風化す

竪穴住居に須恵器のたぐひ並べつつ食みしは稗かこの土間の上

竪穴の戸張りをはねつつ外に出でて北斗の星に何を祈りし

豊饒を女身に祈りしかチブサンの同心円の朱色鮮らし

暮れはてし古墳の丘に星降れば魂も出でこむ高き梢に

高坏に何を盛りしや遠き世につなぐ時間を今も載せたる

誰がためにこもりて彫りしか鮮明に三角紋様・円文壁画

白き壁

山も川も墨いろ農淡あはあはと瀬音が誘ふ遠きふるさと

風吹きて夕陽かげれば思出の人みな消えて白き壁あり

切株にかけてまなこを閉づわれに昔の音して笹鳴り伝ふ

過去思ふ清きながれの川ぞひに見すてられたる白き数珠玉

北風にたたむ水皺のきらめきて織りこまれゆく七いろの過去

命賭けてなしたることもなきわれと思ひて刻む白き冬葱

炎ゆるものすでに失せゆきし低迷のこころに夜の稲妻走る

起伏なきわれのくらしよ独り歩く鉄路のはての夕茜濃し

ひとり居のわが平穩を恐れつつときにはげしき春雷をきく

軋む戸のわが手に重き夕窓に秋風が伝ふ遠きアナウンス

九州の最南端とぞ石投げて石より小さきわれと知りたり

みちのく

みちのくの日暮れは早し家ごとの黄菊に残る淡き夕光^ひ

八幡平の岩山こえきしまなかひに展けし十和田の湖の静けさ

十和田湖のふかきねむりをさましゆく明けのひかりが靄を吸ひゆく

船旅を終へて上れる陸ぞよき帆立貝焼き匂ふ茶屋の灯

遠き世の栄華のさまを残したる金色堂にさやぐ松籟

藤原三代清き木乃伊となり眠るこの金色堂にうつし世遠し

鹿おどりの角ふれあへる音澄みて旅も終の宿の灯あはし

白虎隊ここにて果てし飯盛の墓のかたへに野菊ゆれ咲く

こきと鳴る鳴子こけしの首廻しふるさとおもふみちのくの宿

みちのくに再びくる日あらざらむ
チヤグチヤグ馬コ振れば鈴鳴る

阿蘇

キヤンパーの聖歌きこゆる高原の空に北斗の星はかがやく

吹きぬくる風はや涼し高原のロビーの若き蝶のネクタイ

ゆふかげの伸びし牧場の柵の外に灯るいろして月見草咲く

道問へば裏阿蘇びとのやさしけれ飽かず答ふるその手やすめて

裏阿蘇のはつか色めく藤見えて尾根を残して山霧晴るる

満緑のなだるるなかに屯たむろして憩ふや阿蘇の牧の赤牛

阿蘇野焼火が火をよびてかけ上る阿蘇は神やままこと火の山
風にまかせて走る野焼火奔放に山をも丘をも埋むる火の海

喫茶店に入りたる勢子があらあらと椅子にかけたり野火の香まとひ

病みて

ふと見るや夾竹桃の散るにさへ心ひかるる病みたる窓に

病床のひとりの窓に巢に帰る鳥の一羽がしばし憩へり

病窓より見ゆるはるかのアドバルーンわれより逃げしものひとつに

ゆくすゑの安からぬ死をふとおもふ寝返ればがばと鳴る水枕

花籠より溢るる友情病床の心ひたすら花野にあそぶ

阿蘇の野のしめり持ちたる竜胆の花に病のうれひ埋むる

退院して剥ぐ日めぐりよ入院の日よりの日数が反古となり果つ

万里長城

遠き歴史秘めたる万里長城ぞ雲に接していま静かなり

夷狄退けむと築きし長城尾根縫ひていづこに続く雲はるかなり

遠き世の戦雲はるか望楼に立ちて仰げばうかぶ昼月

城壁に書残したる文字あまたなべて過去へとはこぶ風あり

小雨にけぶる蘇州の運河車窓より旅愁しみじみ心ぬれをり

車窓より展がるはてなき麦秋の野を見てあれば浮ぶ「麦と兵隊」

機より見る黄河のながれ蜿蜒えんえんと興亡の歴史埋めて濁る

大陸に住みたる過去をゆりおこすアカシヤ並木風にさやげば

エスカレーター

愁ひ濃きところにしみて雨吸ひし百日紅の重き花房

尽くるなきわがさびしさの世と思へ拾ひて帰る青き竜の玉
待つ人もなきに急げるバス窓にすこし歪に蹴つきくる春月

うす暗き室に解怠の日日過ぎて玻璃戸に得たる春光は鋭し

(ガラス戸のこと)

すがすがと葉牡丹の渦とき放ちのびあがりみる春宵のいろ

水底に直ぐ立つ水藻の透き見えて波にゆらげる秋光の綾

いくばくの余生のひと日また暮れて麦生の青に重ねゆく過去

ボタ山に秘めたる修羅のかなしみをいやす風あり夏くさそよぐ

語らひのたのしき語尾をはこび去る海より生るる青き夏風

生きゆくと負へる重荷やどの肩もすこし落して下るエスカレーター

ひとり

本読みてしばしさびしさまぎるとも眼鏡はずせばいよいよ独り

果たさざりし夫との旅よ車窓よりひろがる蕎麦の花はゆれあふ

仏壇の埃払へば骨壺がことりと鳴るよ声高かりし夫の

声あげて泣かば心も晴るるべし真昼の鴉あはあはと鳴く

ほろほろと鳴く鳩二羽よわれひとり雑踏逃れてきたる屋上

華麗なるひとの生きかたテレビ見てカボスをしぼる独りの卓に

誰待ちて吹くにあらねど暮近き窓辺に小さく水笛を吹く

花びら

堰落つる水が小川となりてゆくときには野菊の花を咲かせて

葉書一枚持ちてポストに行くこともひとりの仕事蝶が蹤きくる

春来れば花咲くことにありなれて残る齡を鏡におもふ

失ひしもの多き心にきてとまる雨の花びら傘にはなやぐ

花の盛りうたかたにして宴あとの広場うつろに揺るる電球

花びらを重ねし奥にたわやすき美しき死を夢見しは過去

風吹けば満つる不安かゆらゆらとさくらおもたき花の陰影

思ひためしこころ重しも雨吸ひて垂れしさくらの花の重なり

めくるめく落花粉々わがめぐり花に逝きたる人の幻影

散る花にも流るる水にも添ふひかりかく美しく時はうつらふ

余生

あすの日のたのみがたきを正確に秒を読みつつ月蝕すすむ

わが余生清く保たむ危ふさも透視されぬむこけしの細き目に

糸底の汚れ丹念に洗ひつつ祈るは清しきわれの晩年

引算に似て剥ぐ日めぐりよ正確に過去となる夜の秒針をきく

真夜さめてきく葉ずれ音晩年はかく音消して訪るるならむ

たそがれの坂下る足にまとひつく枯草必死終焉必至

歩道橋渡るはひとり遙かなる彼岸明るき夕映を恋ふ

げんげ田

放たれし風船消ゆる空のはて還らざる日の美しき虹

靴ならし帰るうからとてなし確実に待たで訪るる日日の夕暮

時経てば忘れ去ることかなしとも岩ひたしつつ満ちくる春潮

ミサの鐘きこゆるゆふべをひた抱く小さき幸せ閉ざす夕窓

げんげ田のすくなくなりし野を行きて遠き記憶の赤き鼻緒よ

百寿惜春 最近の短歌

何色に咲かむ思ひの夢秘めて思ひ深むる雨の紫陽花

なだれ咲く雨のあじさい競演の色もて叫ぶ個々の存在

雨を恋ふあじさい花鞠枯れてなほ枝をはなれぬ重き未練や

藤の花と語れば式部現れて心をゆるする風むらさきに

寂しければ雨のあじさい海鳴りに合はせ歌うや挽歌となして

手櫛にて髪整ふる乱れ髪乱るる心櫛にからみて

鏡の奥に夢見しは今のわれ増えし白髪の白き哀しみ

われをよぶ古里の川水やせて水鏡なせばべつのわたくし

降りみ降らずみ梅雨雲低くたなびきて終幕とせむ静かに暮るる

看護師がわれの動作につきくる幾度もころびて耐えきし我れを

年を重ねし手の平開けば何もなし力集めて咲きし老梅

永らえて時には憂しと思ふ身に星がささやく明日を待てとぞ

ひとつ覚ええふたつ忘れてゆくわれか散りはじめたる花のおぼろ夜

寒に耐へふくらむつぼみ爛漫の花の賛歌を待つやリハビリ

見納めにならむ思ひの春ゆきて記憶を紡ぐ花の曼荼羅

見るべきもの見ず暮れゆく病窓に明日を約する春の夕やけ

没りつ陽の明日に続かむ夕やけの空かげりゆく春の残光

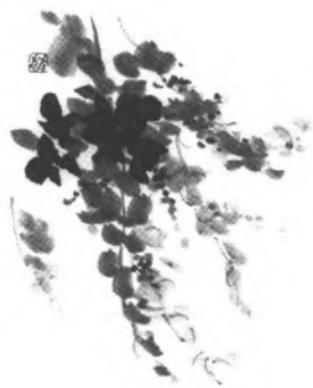
赤き血を持たずば人を疑はじ釣り船灯りに寄りくる烏賊は

甲子園の土持ち帰る小袋に燃ゆる闘志も入れむ球児は

欠けては満つる月のロマンや病床に孤愁深かむる眉月淡し

余所にはよその幸せあらむのびやかに時計が鳴りゐる路地の細道

川
柳
集



新聞紙上掲載川柳

錆びててもじわじわと効く母の釘

死の灰の日本を嘆く渡り鳥

おつとめの不平を妻の聞き上手

足跡の水たまりにも秋は澄み

週末の頭痛きれいな嘘があり

月からの声を歴史の一頁

南極へ肉親の声箱にいれ

別宅へまで週刊誌追いかける

逆境になつて罪のない子を叱り

腕前を仕込めばよそに引きぬかれ

人生を聞いて老父の背を流し

不景気へきちんきちんと納税期

海原の青さの底の水銀禍

ミス入社みなネクタイを取り替えて

代議士の資格腕力加えられ

英霊の孫がしびれるビートルズ

伝言板その一行にある秘密

譲られた席へかなしい齢になり

以上五句は熊日歌壇川上三太郎先生選の句

敗戦の余波まだ消えぬ尋ね人

初詣でヤリクリをした顔でなし

敷島のさくらがなげくゴミの山

チャンネルのどれも明治の気に入らず

新税へ税吏やさしい受け答え

浪人も無駄でなかつた克己心

話し合い一徹者が居て困り

出るところへ出て大物は嘘を言い

亡夫想う踊りの手に抱く盆の月

突張った反旗を降ろす入社の日

帯び解いた渦へ疲れがうずくまり

切手にも涙がにじむ訃のたより

お隣の出世は言わず明日に向く

今日の疲れ脱いだ軍手に黒くため

決断を駅のベンチに確かめる

大物につながるひもを大事にし

帯しめをきりりと再婚辞退する

ハンモック明日の地球を知らず揺れ

いじめられた嫁が手を貸す車椅子

埋れ火の記憶をおこす風にあう

名刺と名刺が品定めする初対面

走る夢ばかり見る車椅子

筋書きのない紙芝居かも知れぬ一生

上役の好みに染まるカメレオン

木の実落つこの従順を包む土

姑の足袋洗って愛情もみほぐす

水中花水の情に心解く

蹴られた缶が向き直っている個性

新婚のカーテン浮世のシミがない

「地球は青かった」が過去になる予報

返り咲く風を左遷の家が待つ

よその時計が鳴っているよその幸せ

根性がまだ古里に戻れない

投げられた所で石は腰を据え

同情の線から誰もふみこまぬ

暖かいこだまが帰る故郷の山

墨染めの奥からのぞく核兵器

いやと言えないから困るヤジロベエ

忘れたい齡を他人が指を折る

通用口あけて預金は受付ける

足跡のゆがんだ所で得た知識

マスクして心の中を覗かせぬ

崖に立って男は風をたしかめる

賄賂の味知らぬ蟻です庶民です
ぬるま湯の中で反旗の色が褪せ
仮面すて素顔で鈴振る願いごと
すたれゆく敬語をなげく五ツ紋
愛の糸紡いでやまぬ母の繭

街角でかぼちやの馬車を待っている

平成の男子をさくら値踏みする

再考を促す父の深い井戸

地雷百、花野の下にあると言う

銀行合併互いの傷をなめ合って

核の出番恐れる地球のひとり言

贖罪は終わりは弥陀の膝に逃げ

この句は、「川柳塔」唐津支部十周年記念大会（平成四年十一月二日）でグラ
ンプリ賞受賞



昭和35年4月3日 金剛川柳会十周年
田中鳴風先生 美喜子夫人先生を囲んで

鶴の瞑想

鶴の瞑想 或いは人より深からん

(昭和六十一年度川柳塔受賞作品)

「現代川柳鑑賞事典」 田口麦彦編著 三省堂 に鶴の瞑想の句ほか十句が収め
られています

社会

屈託のない笑顔でそろばん手放さず

適材適所歯車のネジとなる

コーヒーをブラックで飲み議論好き

標的にならずにすんだ順不同

預金と支払い窓口微妙な風が吹く

栄転へ冷飯組がけちをつけ

頂上に立ってゆるめる胸ボタン

拍手することに馴れてる平社員

妥協する酒を飲んでる曲り角

ストをする顔でなかった入社の日
ハンダグリーーいつか追いかす夢をみる
どこに住んでも税務署が追ってくる
異議すこしある手もまじる手打式
床柱父権と共に小さくなり

正面ばかり見つめて足をすくわれる
自信ある横顔見せてゆずらない

損しない程度に合わせる口の裏

ここは折れておくしたたかな計算

橋かけてまた代議士と呼ばれる気

人間の節目を正す家の紋

三従の世に生きてきた妥協ぐせ

ゆきずりの愛の風待つ募金箱

オートルメのように神社の大安日

激論へ標準語では間に合わず

緑の風に公私のけじめつけてくる

美しい扇のかけから出る噂

決断をうながしている自動ドア

しんがりでよし完走という汗光る

観光へ城明け渡す城下町

足し算へいくつも指を用意する

人間のドラマ生み出す時刻表

まわり来る春を左遷に耐えて待ち

上役の好みに合わせているピエロ

億の寄付名もない人が美しい

主義主張捨てて組織の湯にひたる

揺れている女を誘うメロドラマ

履歴書を笑う飯場の鳩時計

人間の分別かなし袋下げて

平凡な日日に平凡でない世界

チャンネルのどれも歌っている平和

地球廻るたびどこかでもめている

敵に廻せば恐い一人であのもしい

勧誘員他人の老後まで心配し

近く住んで都会は距離を保ち合う

赤い待針でとめておく女の噂

女性優位一番風呂で歌うママ

釦がはずれている先生で親しまれ

風がつれてきた噂に耳を貸す

金一封公表される寄付をする

義理果たすように大臣入れ替える

芸術でない目もまじるヌード展

頂点に立ってポケットのぞかせず

ローン背に住んで青空見失う

以下省略の中にいつもいる下積み

戦争の痛み原爆ドーム泣く

下手は下手なりに取る努力賞

肩書きを捨てて広がる踊りの輪

肩叩き順番という浮世風

そこまでをタクシーで行く主賓

鮮やかに男の折り目見せて退き

政治家へパ一トのつぶやき聞こえない

底辺で善人きれいな金を持つ

勤続賞ひとつを飾って無位無官

人情

ふところろ手昨日の愚痴をむし返す

見栄張って女切ない芝居する

他人ごとなのに病状を聞きたがる

口下手の冗談だれも笑わない

その溝を越えたらと思う夢ひとつ

おしゃべりが何より好きな桜餅

古傷へ他人は尾ひれつけたがり

座ぶとんを裏返しして話題変え

縁談にハイ・ミスという妥協線

幸せは心の鬼の出番なし

考えがついたのか頬杖をはずす

自信過剰安うけ合いをした重荷

幸せを逃さぬように窓をしめ

ある時の表裏こけしに見つめられ

裏切つて得た幸せがうずき出す

葬ひの家で雨傘もたれ合い

信念に生きて失言取り消さず

タイミングよく出た軽いくしゃみ

欲望をこの辺で捨て妥協する

夢のある話に傾くイヤリング

心の奥を知っている宝石の屈折

生真面目でいつも風呂敷持ち歩く

咳ひとつこぼして話に距離をおく

肥後守使って昔を語り合う

折れて出る妻を待つてるタバコの輪

リモコンがときどき狂うコップ酒

いつからか聞き上手になった話下手

あととりが居ます農家の干大根

しんがりにつく癖バスの席がない

やりこめて何かむなしい風の中

現金を拾って良心試される

言うべきことあってうちわを持ちかえる

会物定離駅の時計に見つめられ

コーヒーの匙が時間をもてあまし

親友を遠く隔てた金のこと

愛の均衡崩れてからの隙間風

心底を家裁にさらす仮面脱ぎ

洗濯機に捨てた煩惱渦をまく

四捨五入しても許せぬことがあり

ヤジロベエふと造反がしたくなり

ファツシヨンに負けてる方がふり返る

日傘開いてから女隙を見せず

シェーカーを振って裏側よんでいる

旅に出た無心論者が寺廻る

正座して明治の気骨は妥協せず

甘い水知ってる鬼が金を貸す

自分のことはなぜか分らぬ占い師

虹消えてからの女はよく眠る

眼鏡ふく余裕が芝目よんでいる

開け閉ての気配に淋しさ分かち合い

自信ない話は笑いでしめくくる

ほんものの恋らしい死ぬと言う

鐘の余韻十人十色に聞き分ける

自然と生きもの

菊人形花の命を立ちつくす

散りもみじ水美しく時運ぶ

噴水がときに乱れる風を見せ

シグナルを見上げて拾った昼の月

干し物の留守はつきりと俄か雨

雑音を吸って静かな夜の川

美しい雪が足もと狂わせる

竹の皮はらりと竹が伸びる音

どんぐりは石のくぼみで満足し

思い違いを真赤なバラに自嘲する

ひまわりの真実太陽恐れない

雪ためた竹はジャンプの機をねらう

捨てられた路傍の石を日がぬくめ

にせパールきれいな海の色知らず

マネキンがいつまで見てる秋の空
ひねくれただけを高価に松は売れ

風鈴屋夜市の風をひとり占め

朝刊が古新聞となり日が暮れる

法師蝉泣きそこなつて秋となり

酔いざめの水にもあつた秋の味

富士山を出し惜しみする白い雲

落椿女の嘘はすぐばれる

水車静かに輪廻説いている

充実の銀杏は踊って地に還る

水が出ることに幸せ見つけた日
嘘ひとつかくしきれない花明り

白蓮の寂にもひびくミサの鐘

鳴く虫と悲しさ分ける仕舞風呂

紆余曲折大海までを耐える川

きまぐれな九官鳥が言う本音

スタミナのない捨て犬も母になり

人間の父権を笑うサルのボス

吠え合って犬は連帯深くする

帽子から飛び立つ鳩に空はない

開発のうわさに竹の子さわぎ出す

つながれる範囲で象は足踏みし

職のない猫の哲学昼寝する

檻の虎狩りを忘れた目が濁り

ふぐ提灯悲しい顔で吊るされる

ふるさとの空へ
騏驎は首伸ばす

出目金の悟り
優雅に泳ぐだけ

金魚ひらひら
意に沿わぬ一生かも

終戦直後

十代の風切ってゆくパンタロン

草の根を分けて見つけたアイヒマン

ピケ隊も警官隊も腕自慢

親切をどこかにおいた袖カバー

人生

ブラジャーでやっ
と押さえた春の線

開運の印持
っていて芽がでない

欲捨てた心
に四季の星が降る

つかの間を
同じリズムでバスにゆれ

のんきそうにしてるが足し算が達者

直線コースはずれて人情を拾い

二枚舌の男がころぶ出世坂

フライパンの油に憂さをはじかせる

栄転を見送る駅の隅にいる

一生懸命生きても小さな椅子の上

友の訃へ一汁一菜ありがたし

絶壁が見えぬから幸せかも知れず

ゆき合って分れる蟻に似た縁

糸底にたまるある日のノラの唄

すわり具合に沢庵石はやっとな馴れ

結び目がいつか解けてたセーラー服

逆境に影法師だけがついてくる

焼餅の芯がこぼんでいる頑固

ゆく雲を思い思いで見ると老後

闘病の春待つ花の種子と棲む

気ままに生きても家紋がはなれない

定年を郵便受けがさびしがり

辻褄を合わすつもりか再婚し

いざこざを捨てて明日へ竹を踏む

石投げた無力を知らせる広い海
履歴書に一行の汚^し点^みつきまとい
ふり返る足跡ゆがんでいる苦勞
放浪の旅を鴉がないてくれ
春風に心張り棒がゆるみ出す

グルメ族最後は母の味を恋う

ラストまで母わき役に甘んじる

吉報へきらきら光る茹卵

正直すぎた人生で物足らず

会者定離ならんで歩くよその人

手に握る運命線に妥協する

石橋を何度も叩いて出おくれる

のびのびと歩こう足に合わない靴捨てて

不器用だが真面目が取りえの金庫番

筋書きのない紙芝居かも知れぬ一生

反^ほ古^ご焼いて思い出焼いて明日に生く

それぞれに咲いた個性で皿廻す

平等に生まれて平等には終らない

過去の栄光ならぶ左遷の飾り棚

平均寿命つぶやく世相へまた延びる

共白髪彼岸への道支え合う

定年になって身近な風の音

記憶つなぐ糸が悲しく風化する

波乱万丈こんなに軽い遺骨箱

人生の残りをホームにぬくめ合い

墨絵めく記憶になつてゆく余生

家族とひとり

ベビーホテルおとぎ話の星が泣き

愛情の釘をママはかけ違い

いたずらをせぬ子に育ち笑わない

ゆりかごに明日の地球を知らない子

風船の糸をしつかり所有権

選果機のみかんが歌う落ちこぼれ

宿題へ入道雲が話しかけ

わがままを聞けば話せる親父にし

縄とびをする子へ明日がある弾み

子の問いに母の雑学ゆきづまる

偏差値という遮断機に親の鞭

絆という紐を子供は投げ返す

立ち直る余白残して子を叱り

家出した子へ夕月の里ごころ

石投げて少年無限の夢を追う

いい子ばかりではつまらない公園

夏柑を爪立ててむく反抗期

折返し点でわかった母の塩

横顔をいつも見せてる反抗期

吸取紙非行のしみが吸いきれず

反対する母の小さな背に負ける

夕暮れを待つ鍵っ子に日がながい

父と子の間を埋めるキヤッチボール

子育てが終わると軋む縄電車

太陽にも火消壺にも母はなり

絆という足手まといの縄電車

母子家庭夕やけ雲からはげまされ

一生をあなたに賭けてみる決意

頼りたいあなた
あなたの歩巾が
広すぎる

軋む戸の癖に合わせる嫁の知恵

母に書く頼り一病伏せておく

同居して三猿になる姑の知恵

信頼の絆で廻る夫婦独楽

老いらくの孤独を芯に糸糸巻

孤独と気楽は背中合せよ爪を切る

記憶つなぐ糸が悲しく風化する

釘打てば耐ゆる孤独にひびき合う

わき道にそれた孤独に虫がなき

わさびの涙を誘うひとりの夜

孤独ある時西瓜の種かぞえ

パズル解いて笑ってひとり敬老日

さびしさを蛍袋にためている

山彦へほんとの孤独おしえら

ひとり旅同士の席をぬくめ合う

晩年へカナカナ身近にないてくれ

マラソンの孤独影法師と走る

或る計算からはずされる老人

老人に指定席なし核家族

鉛筆の芯いつも尖らせている孤独

散らしても片づけてもさびしい独り

部屋の灯をみんな灯してみる独り

うるのおくやま越えて来ました座りだこ

川柳塔誌掲載川柳

平成十一年から二十年まで川柳塔誌に投稿掲載された川柳の主なものを以下に列記いたしました。

平成十一年

心貧しく竹の絵がまだ描けぬ

はやされて帰って来ない竹とんぼ

追い風が吹くまでマグマためている
宙返り何度やっても芽がでない

落葉はらはら中原中也をつれてくる

電飾のがんじがらめに泣く並木

由良の戸を渡りそこねて年が暮れ

尺とり虫律儀に歩幅はかっている

花畑あると限らぬ峠越え

枯れてから、しがらみ解ける 蔦つた蔓かずら

変る世に眼鏡の焦点いとずらす

叱咤激励忘れた捻子の古時計

夢ひとつふきこぼれてる
齋なすな粥かゆ

水仙の葉がねじれてる子の反旗

いつからか目立ちたがりやになった亀

夫婦別姓妻がタクトを振り出した

聖書がなぜかホテルにおいてある

愛染の風にさくらが狂い舞う

夜さくらに恋を深める道祖神

平成の男子をさくら値踏みする

もののふといくさと桜と茶髪の子

西行も兵も過去形花の雨

霧おぼろ記憶おぼろの花浄土

泣きに來た古里の川も泣いている

相槌を打って冷たい風に会う

べからずが解かれ一億総多弁

菜の花のおぼろの果てに亡母が居る

神楽殿誰も舞わねば蝶が舞う

湧き水の瀬音に嘘が言い出せぬ

以下同文の一生でしたカスミ草

米寿米寿と囃され彼岸をふと忘れ

身を焼いて乱舞す蛍の恋かなし

近く舞う螢は亡夫かもしれぬ

生一瞬恋一瞬の螢の火

螢火万灯 彼岸明るい浄土かも

命あるものみな恋をして輪廻かな

虹の七色枯れた心に灯を点す

私の未練知ってる虹が消え残る

貧樂でよし私の宝は雪、月、花

正論が言えぬよい子の成れの果て

一筆啓上携帯電話に笑われる

逆風を味方につける男坂

水槽から出られぬ魚の葬列

上段にメロン序列があるらしい

逆さまにバラを干してる下克上

露の身につゆけき草がまといつく

平成十二年

再生は出来ぬと青い地球言う

枯芦の声をふと聞く歳になり

葉牡丹の思い犇めく紅の渦

薄氷静かに踏んでまだ童女

妥協知らぬ怒涛いつまで打ち合うて

モナ・リザの笑いが不気味二〇〇〇年

万物流転句読点打つ除夜の鐘

上向いて落ちてゐる手袋の思案

花園で迷子になった竹とんぼ

ついてくる鳩よお前もひとりきり

海に尽く一筋道がある余生

天からの弔辞ひらひら風花す

山茶花ちりぢり人の命のあとや先

くちづけの彫像刻をとめている

美しい人工芝でかくす嘘

キレル子に一日麦を踏ませたい

真夜中のさくらが歌っている軍歌

それからのことは知らないバラの花

蕾まだ百鬼夜行の世を知らず

道連れを亡くしてからの暗夜行路

青葉の寡黙サタンがゆする十七歳

貧しくてやはりピエロに味方する

露の皮むいて宝石知らぬ指

軽い嘘ついて仁丹呑んでいる

踊らせた雑魚を見捨てる冬の風
阿吽の息しっかり合ってる命綱

三振してもいいよ若者の正論

おひやをまた注ぎにきた長話

あくまでも苦い苦瓜のプライド

雨降れば雨月と言つて酒を酌み
月光に包まれ五欲を恥じており

平成十三年

赤い風船とり逃がした冬のてのひら

女流棋士きれいな指で追いつめる

宴会の酒に仮面がずり落ちる

骨のないくらげ上手に生きている

米びつを満杯にして心飢え

地雷百、花野の下にあると言う

活断層の上でたのしむいい湯だな

試験問題洩れてくすりと笑う絵馬

口も手も元気な女の自由席

一日を大事に今日の風惜しむ

初雪を踏むにためらう五欲の身

湯豆腐はゆらりと逃げて妥協せず

余裕少し生まれて鬼を遊ばせる

老人の存在示す咳一つ

余生しみじみ感謝の糸を今日も巻く

ファミコンは知らぬが耳は立てている

ロボットが内緒話をする不況

自己満足真冬の女のノースリーブ

少女が覗く鏡の奥にある未来

嫌な話強く振り切る傘雫

さくら花くさ嫌いになり申し

未練まだあって燃えてる落椿

雑踏も命の音よ通夜に行く

言えば傷つけるから苺をつぶす

今日の風つかみそこねた猫じゃらし

こだわりを持ち続ける振り花

他人様を憎めないから胃をこわす

ふり返るわが人生の薄い色

やさしさをうれしく止めるホツチキス

大正の風つれてくる
渋うちわ
バーゲンで宝探しをするつもり

われに似て叩けば回る扇風機

豊作の田んぼを国が去勢する

自動ドア性善説を疑わず

言い過ぎた朝は溶けない角砂糖

ケイタイの遊び心で火傷する

空からのビルがお墓に見え出した

一念発起ママがダンスを習い出す

その裏を読んで賢い笛を吹く

これから
は神に
まかせ
る時刻
表

平成十四年

回転寿司もひとつ如何と攻めてくる

ガム噛んで喜怒哀楽を押し殺し

世を嘆き欄間を睨む鬼の面

欲しい物何もなく買うサロンパス

シルバーには配らぬ怪しいテイツシユ
年寄りが散歩の犬に道ゆずる

賛否両論そろばんが震源地

老いをくすぐる勧誘員のやさしさ
言いたきをこらえて喉が痛くなり

ときめきを忘れて涙もろくなり

高砂やいずれ別れるコントかも

百円シヨップで心豊かになる不思議

幸せは煮豆ぐつつぐつつふきこぼれ

お先にどうぞ少し利口になりました

いつまで続くか私の綴り方

手のひらを返されて知る人の裏

利き腕はまさかの時に温存し

言いたいことを言えずに続く偏頭痛

リストトラ知らぬ蟻たちの労働歌

世渡りも料理も下手で長生きし

つまずいた石が私の恩師です

その裏を知った無口が恐ろしい

美しいラベルの裏は黒かった

乾いてる心に咲かせる水中花

なりゆきに任せて生きる数え歌

コンプレックスあるから心を手を洗う

平成十五年

おみくじに縁談よろしとある卒寿

広告の裏側を読む悪い癖

存在感老人軽い咳をする

自問自答して足跡をたしかめる

腹芸の上手な鬼の鬼ごっこ

妥協せず回った無冠の父の独楽

無意識にかけ声かけてふと哀し

おしやれは武器ブランド品に殺到し

女恐ろし万能鋏持っている

プライドを捨てて気楽な竹トンボ

そうですかと受け流す平和主義

何もかもありがたい付録の人生

イラク戦争砂漠に昇る赤い月

物忘れ周囲がひそひそ話する

あいまいな笑顔で風を避けている

一日善女鬼を静めて聞く法話

ケイタイとカタカナ日本の色を変え

器用貧乏多芸多趣味のよろけ独楽

本読んで綻びかけた糸つなぐ

キヤサリンが私の若い日つれて逝き

霧が深くなってきた私の忘れもの

お安い御用あなたに花を持たせます

しんがりで私の歩幅狭くなり

決断へ一呼吸おく傷を持ち

少子化を嘆く祭りと地藏様

稲光り心の傷を刺してゆく

我慢した言葉をいれる箸袋

うしろの顔色読んでいる背中

平成十六年

ケセラセラと言つて運勢欄をみる

はんなりと話を逸らす金のこと

ゆつくりとわが道をゆくかたつむり

母は強しシングルマザーという美名

浅い夢でした私のいろは坂

変わる世や真冬の女のノースリーブ

除夜の鐘私の小さい鬼を打つ

背伸びするとぐらつく私の脚立

負けても負けても走る馬の律儀

穏やかな顔してゆずらぬものを持つ

子供の人さし指が恐い鬼

顔ひとつ義理と情けに責められる

相合傘したことがないカスミ草

パソコン不得手信玄袋の中の知恵

逆転したい私の九回裏

油切れした頭にシヨパンの風を入れ

きれいな花と監視カメラがある銀行

相槌が上手で秘密ころげ出す

二兎を追う力不足のよろけ独楽

白内障治してゴミがやたら見え

出張はいいな妻のリモコン届かない

青空の深さと平和語り合う

温度差を感じる握手にこやかに

退くことを知ってた母の処方箋

吊革に下がる惰性で生きている

離着陸の時に唱える観音経

踊り場で義理というもの捨てました

追い風など吹かぬと悟った曲がり角

逆縁の淋しさ青い柿が落ち

時には聞こえぬふりをして距離保つ

いつからか私の釘ゆるみ出し

学歴詐称なぜか憎めぬ男みち

ライバル同士老いて垣根をとり払い

平成十七年

影法師とどこへ行こうかお天気だ

忘れ物届けきれいな花を買う

人知れず白バラだって燃えている

紙縊ひねる指が昔をひきよせる

来る来ない花びら来ないで終る

アドバルーンゆらゆら自分を見失う

山海の珍味のはての白湯の味

重ね餅に齡重ねている挽歌

手を叩く元気がなくて隠居する

梅凜と浮き世の塵をよせつけず

仰げば尊しみな仰がなくなった

恥じらいもときめきも捨てたローヒール

負けるのもいい薬だよ明日がある

ふだん着でふだんの暮らしにある平和

追いかけたが逃げ水だった夢ひとつ

外せばすぐ円になる輪ゴムの自負

是非を問う切り取り線にある不安

ふだん着が似合うよと言う猫じゃらし

完熟のポスト夢みる青い柿

あとずさり覚えて気持楽になり

年寄りにそこまでと言う仕切り線

嫁の声聞こえる距離に居て平和

あさましや絶食七日目粥の夢

キッチンで生きてる母の目分量

そこまでは言わずに糸をつないどく

平成十八年

工事した汗が見ている渡り始め

枝豆がビールと聞いている裏話

老いて思う待ち時間のロスタイム

耳よりな話へ補聴器寄ってくる

耳遠い真似を老人武器にする

責任転嫁自分の尻尾に気がつかぬ

実権を嫁に渡してから無口

貧しいが千両万両庭にある

何もないが付録の人生丸儲け

凍て滝が残り時間を止めている

まだ頑張るのですかと言う影法師

渋柿が渋を抜かれたイエスマン

大正は遠く五欲の鬼が増え

優しい言葉に身構える悲しさ

知らぬが仏株の世界の怖さなど

旅の終わり風が身軽にしてくれた

調子よく相槌打った胃が痛い

老人を舐めて脅しの葉書来る

なりゆきに任す私の時刻表

にこやかに本音を包む箸袋

優しい顔してマダマためている

母の名のない身に母の日は長い

帰り待つ人居ないと言う重い足

ど忘れとばかり言えない背が寒い

南風北風その日の風に合わせ生き

水はじくきれいな茄子のプライドだ

わがうしろ姿に気づかなかったミス

自分では気づかぬ口臭のたぐい

愛国是非論しきりにゆれる葱坊主

九十になってごらんと独り言

背なの荷が軽くなりゆく物忘れ

遺言書にまた追加する忘れもの

パソコンワープロ不要老いの一徹

ゴマメの歯ぎしり私も太鼓を叩きたい

テポドン発射ドン・キホーテが手を叩く

天命を知る伸びきったゴムの紐

世を嘆き糠みそ臭い手を洗う

白菜まっ二つ芯まで白い真実

関係ないでしよに始まる親ばなれ

想定外でした熟年の離婚

平成十九年

一声の清濁鶴と人間と

見えぬが花電話で誘う美顔術

ロボットが人間臭くなってきた

辞書を引く認知予防の処方箋

家だけの日の丸すこし低く揚げ
屠蘇を酌む賀詞しみじみと独り言

数の子の億の命をめでたがり

トーストがとび出し促す初出勤

杖つけば見知らぬ杖が話しかけ

言えは傷つく人あり貝になる

本当のことが聞きたい壁の耳

長寿ありがたく浴びる花吹雪

花かげで花と昭和を語り合う

花椿思い余って身を投げる

一杯のコーヒーからの会者定離

かみ合わぬ話をほぐす缶ビール

反論が出来ない貧血のわたし

慎重派途中下車して考える

カード無用石橋叩く戦前派

メーデーに蟻も歌うか労働歌

マンション林立活断層の苦笑い

それなりの楽しみがある名無し草

歩き疲れてお地藏様とお話し

しりごみをしてきた私の負の頁

あの角を曲がればよかつた負け惜しみ

縁側に座布団二つある平和

仕方がないと何度も言える幸せ

握手していて温度差の風を読む

本当の心知りたい裏表紙

買わないが莫塵売りに出す麦茶

それからのは知らない花時計

平成二十年

椿の花ぼとりリストラされました

子の問いに話を外らす不整脈

嫌な思い出忘れたい日の卵とじ

お金でならずぐ解けるもろもろ

記憶おぼろで私の荷物軽くなる

疑問符の答えを探すがムかんで

笑い袋の底が破れている孤独

ご好意に甘えて自分見失う

嘘少し書けばかすれるボールペン

糸巻きにつくろいした日を巻いている

ポケットに老いの哀しみためている

よろめいてすがる物ないひとり者

なるようになるさと風にまかせてる

思い出を小さくたたんでいる扇子

同窓の親しさ命ぬくめ合い

台所の空気が乾く妻の留守

本心をさぐるおいしい話する

平成二十五、二十六年川柳塔誌掲載川柳

転居後生活が落ち着きもう一度川柳を作ってみようかという気になり、できたものを同人誌の川柳塔に投稿し、平成二十五年十月号から幸い誌上にのせていただけると言うようになりました。

平成二十五年十月号

口が乾く私は古いボールペン

川柳がやめられぬ水少し湧けば

平均寿命の文字が痛い長寿

鏡の奥で別の私を遊ばせる

遺言書私は裸になりました

十一月号

自信ないが笑窪二つを頂いた

と言われても私の色は変えられず

政界をがらがらぼんで洗いたい

やさしさと厳しさ波のうら表

平
和
大
好
き
太
陽
と
炎
え
る
向
日
葵

十二月号

百寿の髪染めている哀しい自虐

ほろ酔いの気分になってみたかった

炎える熟柿が私に起てと言う

知らない人に日傘傾けた赤信号

百の橋渡って失くした赤い毬

平成二十六年一月号

三桁の寿齡ただただ拝む御来光

波高し力集めて咲きし老梅

孤高松の木起てよと叫ぶ災害地

追いかけて確かめましたのだ仏

結婚離婚ままごとめいて冬に泣く

三月号

甘酒屋に負けて一句を得た梅見

人間忙し猫の哲学昼寝する

それぞれの過去の伏せ笑うまぜ御飯

髪切つて欲捨ててゆくひとり旅

眠れない心は広い野に遊ぶ

天を指す梅の一と枝晩節の志

あとがき

「下手の横好き」の言葉通りの川柳、短歌、俳句の三部作を創りました。川柳と短歌は昭和三十年の前後から熊日新聞の文芸欄に投句、投歌して、当時の選者は川柳が川上三太郎先生、短歌が斎藤史先生いろんな先生方がおられて、時々新聞紙上に自分の名前がでるのが嬉しくて、それを大学ノートにすきまなく切り貼りしておりました。

新聞記事や私の少しばかりの読書感想文も掲載していただきましたこともありましたがノートが二冊になりましたのを、今年はじめに姪夫妻に見せましたところ、これを反故にするのは残念だから他の作品もあわせて一冊にまとめたらといいますので、百歳の坂をこえたことでもありますし、

どうせ時が消しゆく足跡の拙い本と思いますが欲がでまして未熟な俳句や短歌まで入れることに致しました。

俳句は岩下ゆう二先生からご指導を頂き、また中村汀女先生の江津湖のご実家での楽しかった思い出があります。短歌は「南風」の同人に入らせていただき長い間続けてきました。短歌を清書したノートを転居のいざこざで紛失しましたことが何より残念でこの本に転載できなかつたことが悔やまれますが、歌集「夕虹」からの歌と雑記帳に書いていた歌を集めました。

川柳は今亡き熊本大学教授田中鳴風先生から初めて川柳のご指導を頂き御他界後はご夫人の美喜子先生や鳴風先生と共に熊本の地に川柳の基礎を築かれました佐野ト古先生のご指導を受けてまいりました。昭和五十八年十一月から川柳塔同人の有働芳仙様のお世話により川柳塔社に入会させ

て頂き現在に至っております。

三部門全体では膨大な量になりました。どうなることかと思いましたが乗りかかった船だとばかりやさしい二人に励まされ連日連夜作業を続けてくれてやっとならぬ原稿が出来上がりました。そのほか、全般にわたりわが事のよきに熱心に心配してくれて、心から感謝しています。

一老婆のみみずのたわ言として御笑覧頂けましたら幸せに存じます。また大勢の方々に製本全般にわたり御指導、御援助して頂くことになりましたこと、ここに厚く御礼申し上げます。

平成二十六年四月吉日

永田俊子

なが た とし こ
永 田 俊 子

略 歴

- 大正元年（1912年） 熊本県生まれ
- 昭和28年（1953年） 熊本川柳研究会に入会
田中鳴風氏に師事
- 昭和48年、59年（1973年84年） 熊日川柳大会総合1位
- 昭和56年（1981年） 熊本県民文芸賞1位
- 昭和58年（1983年） 川柳塔社入会
- 昭和60年（1985年） 熊本県民文芸賞 佳作3位
- 昭和61年（1986年） 川柳塔賞受賞
- 昭和62年（1987年） 川柳塔 各地柳壇賞受賞
- 平成5年（1995年） 川柳塔 路郎賞受賞
- 平成5年（1995年） 第21回熊本県芸術文化功労賞受賞 川柳部門
- 平成18年（2013年） 川柳塔 檸檬賞受賞
- 現在川柳塔社同人 熊本川柳会同人で活動を続ける



句集に『鶴の瞑想』、歌集に『夕虹』

川柳塔同人として33年間投句していたことを賞して、川柳塔の編集者(朱)が平成25年12月号で編集後記に以下のように記されています。

「熊本の同人・永田俊子さんは大正元年11月10日生まれ。今年101歳を迎えられた。101歳の現役川柳作家を他に知らない。高齢化時代を生き抜くには、ほどほどの健康とお金と生きがいが要る。川柳には不思議な力がある。前向きに生きる勇気を与えてくれる。俊子さんの益々のご多幸をお祈りすると共に私たちもはるか彼方に輝く川柳の高嶺を目指したい。」

大変名誉のことだと感謝申し上げます。

『野 菊』

2014年10月 1日

著者 永田 俊子

住所 / 〒862-0959

熊本市中央区白山2-11-16 おはな402

電話 (096) 371-0657

印刷 コロニー印刷

〒860-0051

熊本市西区二本木 3丁目12-37

☎(096) 353-1291
